



新 装 版

# HEAVEN'S DOOR

Ayumu Takahashi 高橋 歩



この物語は、  
コココーラの大好きな20歳の青年と、その仲間たちの  
元気あふれる冒険の物語です。

本当の自分を探して……

新装版

# HEAVEN'S DOOR

目次

第一章 「仲間とアメリカンバーを始める」……………7

【1】 夢は逃げない、逃げるのはいつも自分なんだ！

【2】 「サラリーマンにはなりたくない！」

【3】 夢のつぼみ

【4】 真夜中の人生教育

【5】 人生山あり谷 啓「がちょーん」

【6】 「憧れ」を現実にしようぜ！

第二章 「青い海でイルカと泳ぐ」……………53

【1】 イルカと話せたらいいよね

【2】 青い海でイルカと逢って

【3】 地球とイルカと人間と

第三章 「インドの山奥でサイババに逢う」……………69

【1】 宇宙の一番はじっこは？

【2】 「性」なる僕らの「聖」なる旅

【3】サイババワールドへようこそ

【4】神様との個人面談

【5】ニッコリ笑うサイババ

第四章 「世界で一番優しい女性マザー・テレサに恋する」……………103

↳スラムとデイズニーランドのあいだで

第五章 「盲導犬の頑張りに感動」……………115

↳盲導犬が大笑いする日

最終章 「HEAVEN'S DOOR」……………125

HEAVEN'S DOOR ↳「幸せの扉」を開けよう！

執筆後記……………137

新装版発売記念「俺たちの青春」座談会 IN ROCKWELL'S 千葉店……………144



## 第一章

### 仲間とアメリカンバーを始める

【一】夢は逃げない、逃げるのはいつも自分なんだ！

OLD AMERICAN BAR 「ロックウェルズ ROCKWELL'S」 店内

「いらっしやいませー！」

「お二人様ですね。じゃ、こちらへどうぞ」

「ねえ、このカクテルって、どの酒を入れるんだっけ？」

「もう忘れちゃったの？ ジンとコアントローとレモンだよ！ おまえそれでもバーテ  
ンダーかよー！」

「やばいよ！ ハンバーグにタマネギ入れるの忘れちゃったよ！」

「何やってんだよ！ 早く作りなわせて。お客さん怒っちゃうぞ！」

「見ろよ、あの子メチャクチャ可愛いじゃん。なんかサービスしてこようよ」

「マジ？ どれどれ。あっ、本当だ！ かなりタイプだよ！ オレが行くぜ！」



## OLD AMERICAN BAR 「ROCKWELL'S」

二十歳の貧乏学生だった僕らが四人で始めた、小さなカクテルバーだ。

古き良きアメリカを代表する画家『ノーマン・ロックウェル』の素敵な絵に囲まれ、六十年代〜八十年代の名曲を聴きながら、百種類以上のカクテルやバーボンを楽しんでみませんか。

フレンドリーでラブリーな店員が、あなたをお待ちしています！

PS・サービス料やチャージ料は一切、頂いておりませんのでお気軽にどうぞ。  
なんていうアメリカンスタイルの気軽な店なんだ。

「お金もノウハウもない若者に、自分たちのお店なんて出せる訳ないでしょ。もし出来ても、どうせすぐに潰れるんだから、やめときなさい。世の中そんなに甘くないのよ、坊や」

という、たくさんの常識あるオジさん、オバさんたちの予想に反して、一年半後の現在は千葉店、横浜店、吉祥寺店（仮）と三店舗に増え、快進撃を続けている僕らの「ROCKWELL'S」。

最初は四人だった仲間も、今では十二人になった。そして全社員の平均年齢は二十歳JUST! というクラブ活動みたいな会社が出来てしまったんだ。

その名も「サンクチュアリ」。

僕らの会社は、自称「日本一若くて、日本一熱くて、日本一バカ」な会社だ。

「夢は逃げない、逃げるのはいつも自分なんだ!」

「『成功か? 失敗か?』じゃないよ。『成功するまでやれば、必ず成功する』だけ!」

「男はなあ、口で語るな、背中語れ!」

なーんて言葉を合言葉に頑張りながら時には、

「夢は逃げない、逃げるのはいつも女なんだ!」と失恋に涙したり、「酒は飲んでも飲まれるな。でも僕、飲まれてます!」と酒に溺れて人生を語り合っている。

そんな僕らが強く信じていること。それは、

「人間は誰だって、好きなものや、大切なもの、やりたいことのためには、物凄いエネルギーを出せるんだ」ってことだ。

『火事場のクソ力』なんてよく言うけど、大好きな恋人が火事で死にそうになっている

時、人間は水がいっぱいに入った風呂釜を持ち上げてしまうだけの力を実際に持っている。

海に落ちて溺れかけている赤ちゃんを、まったく泳げないはずの母親が、何百メートルも泳いで助けてしまうことが現実にある。

本気になれば、本当はなんだって出来る力をみんな持つてるんだ。

ただ、その力は、好きなものや、大切なもの、やりたいことのためにしか発揮することが出来ない。だから『やりたいことをやって、食べていくこと』『夢を食って生きていくこと』をあきらめないでいたい。

「プロ野球選手になりたい！」

「歌手になりたい！」

「プロサーファーになりたい！」 e t c . . .

僕には、子供の頃からいくつも夢があったはずなのに、いつも心のどこかで（自分には無理だ。そんなに才能もないし）と思って、あきらめ続けてきた。今まで（本気でやってみよう！）と命懸けでチャレンジしてみたことは一度もなかった。

だから、（気の合う仲間と楽しいお店を始めたい）と思った時、（今度こそ本気でチャレンジしてみよう！）と心に決めたんだ。

なんの特別な才能もなく、特別な過去もない普通の僕らでも、本気になってやれば、まわりは味方してくれた。

「やりたいこと、本気になって始めようよ。ペースなんて全然気にすることないんだし。人間はもともと、『バク』と同じように、夢を食って生きていける動物のはずじゃん！」

そんな気持ちがいっぱい詰まった、僕らの「アメリカカンバー出店物語」。

ポテトチップスでも食べながら、気軽に聞いてやって下さい。

【2】「サラリーマンにはなりたくない！」

二十歳の夏、僕には夢がなかった。

昼は大学で教授の子守歌を聞きながら居眠りし、夜は宅配ピザ屋さんでアルバイト

をしていた。

（このまま普通のサラリーマンになって、そのまま平凡な人生を送りたくないなあ。もつとドラマチックな人生を…）

なんて思っているものの、「じゃ、あなたは何になりたいの？」と聞かれても、何も思いつかなかった。

今の自分がそんなに好きじゃなかったし、今の生活もそんなに楽しくなかったけど、だからといって、「何をすればいいのか」は分からなかった。

とにかく、僕はすべてが「人並み」だったんだ。

人並みには勉強も出来たし、人並みにはエッチもしてた。

人並みには趣味もあったし、人並みには友達もいた。

だけど、他人より優れた『スペシャル』なものは何もなかった。

心から「親友」と呼べる友達は一人もいなかった。

心から真剣になつたり、本気になって打ち込むものがなかった。

死ぬほど女を愛したり、血の滲むような努力をしたことがなかった。

（素敵な夢を追って、熱く生きてみたいのになあ）と思いながらも、なんとなく過ぎていく平凡な毎日に、流されてしまう僕だった。

（このままじゃやばいな。でも、なんでオレは夢が見つけれないんだろう。どうしたらもつと、生き生きとHAPPYな毎日を過ごせるんだろう…）

なんて、悩んでいたある日、久しぶりに高校時代の先輩に会った。渋谷の外れにある小さなバーのカウンター席で、二杯目のバドワイザーを飲みながら、僕は先輩からとても興味深い話を聞いた。

「おまえさあ、ノミのジャンプって話、知ってる？」

「いや、知らないけど。なんですか、それ」

「ノミは知ってるだろ。ほら、猫の体によくくつついてる、ゴマつぶみたいなの黒い小さな虫いるじゃん」

「はい、はい。知ってます。あのピョンピョン跳ぶヤツでしょ」

「そう。ノミってさあ、マイケル・ジョーダンよりもジャンプ力があってな、普通1メ

「トール以上も跳べるんだって。知ってた？」

「いや。知らないっす。でもそれがどうかしたんですか」

「そのノミを捕まえてきてテーブルにのせるじゃん。そんで上から30センチ四方の透明なガラスケースをかぶせる。そうなるとノミはジャンプするたびに、30センチの高さで頭をぶつけちゃうようになるわけだ。何度跳んでも、30センチの高さで頭をぶつけて、落ちていくわけだな。分かる？」

「うん。分かる分かる」

「さあ、そこで問題です。一時間後にガラスケースを外した時、ノミはどうなるでしょうか？」

「エッ、どうなるかって。うーん、やっぱり（自由になった！）と喜んで、思いっきり跳びまくるんじゃないんですか。あつちに、こつちに、ピョンピョンと……」

「甘い！」先輩は怪しい微笑みを浮かべながら続けた。

「よく聞けよ。ノミはなあ、ガラスケースを外しても30センチしか跳ばなくなっちゃうんだって。なぜかって言うとな、（自分は30センチ以上跳べなくなっちゃった）と

『錯覚』しちやうんだ。ただ何度か頭をぶつけただけでだぜ。残酷なんだけど、もう二度と30センチ以上跳ばなくなるんだって。怖いよな、錯覚って」

もうひとつ、似た話で「子象の鎖くさり」という話も聞いた。

生まれたばかりの子供の象の足に、3メートルの鎖をつけて、ポールに結びつけておく。そうすると、その子象はポールを中心に半径3メートルの円から出られなくなるわけだ。

そして二、三日後につないでいた鎖を外してみても、やっぱり、当分の間は半径3メートルの円から出ようとしなくなる。というより（出られないんだ）と錯覚してしまいうらしい。

最初、先輩がなんでこんな話をするのか分からなかった。でも、しばらくしてやっとなつてくれた。

（僕は、このノミや子象と同じなんだ…）

たった二十年間の人生で経験した、いくつかの失敗や、苦い思い出だけで「僕の才能はこのぐらいしかない」と勝手に『錯覚』しているんだ。こんなオレだって、今ま



でやってみなかつただけで、本当はやれば出来るのかもしれない…

でも、何をやればいいんだろう？

オレって、何がやりたいんだろう？

### 【3】夢のつぼみ

そんな時に、偶然見た映画。

それが、トム・クルーズ主演の『カクテル』という映画だった。

主役のトム・クルーズがバーテンダーとして成長しながら、様々なトラブルを乗り越え、最後には美人の奥さんと二人で自分達の店を始める。というシンプルなストーリーだった。僕はムチャクチャ感動した。

最高にカッコよかった。

この瞬間、「オレも自分の店をやりたい！」という『夢のつぼみ』が僕の心に芽生え